韓国の李箱と日本の横光利一の文学

――東京とソウルの経験と作品の類似性を中心にして――

李　錦宰

一　李箱文学における東京

李箱（本名　金海卿、一九一〇～一九三七）は、一九二九年に京城高等工業学校を卒業し、その年の四月に朝鮮総督府内務局建築課に技手として就職した。彼は一九三〇年に韓国語で書いた『十二月十二日』を発表するが、この作品は、李箱の最初の小説であり、唯一の長編小説になる。その以降、一九三一年と一九三二年には日本語詩を書いて、『朝鮮と建築』に発表した。それが『異常の可逆反応』（第十輯　第七号）『烏瞰図』（第十輯　第八号）『三次角設計図』（第十輯第十号）『建築無限六面角体』（第十一輯　第七号）であった。

李箱は一九三〇年に最初の喀血をし、一九三三年には二次の喀血をした。そのため、同年の四月に朝鮮総督府を辞職した。李箱は一九三四年七月二四日から一九三四年八月八日まで『朝鮮中央日報』に『烏瞰図（オカムド）』を連載する。『烏瞰図』は、韓国語の詩で「詩第一号」から「詩第十五号」まで発表された。「烏瞰図」は、李箱の造語であり、「烏瞰図」という「不吉な鳥とされている鴉が人間を見下ろすという奇抜な着想や「詩第〇号」のような変わった題名などに、モダニズムとしての李箱の作風の一面」[1]が見られる。

しかし、『烏瞰図』は読者からの批判が高まったため、途中で中断された。「オカムド（烏瞰図）」という言葉はありえない、「チョカムド（鳥瞰図）」の間違いではないかと新聞社の文選部をはじめ読者までの抗議があったからである。それに李箱詩は難解であったため、読者は彼の詩が理解できなかった。このようなことから、「烏瞰図」の連載は三〇回の予定であったが、十五回で中断されてしまった。李箱は読者からの批判と反応に対し、「二千点の中から三十点」を選んだものであると言って、自分の作品が理解できない読者の無知を嘆いた。

李箱は、金起林宛ての手紙に「小説を書く」と言って、一九三六年九月に『翼（ナルゲ）』を発表した。『翼』は、現在は李箱文学において最高の傑作と評価されるが、発表当時は、「これくらいの作品は、これから七、八年前の新心理主義の盛んでいたころの日本文壇の新進作壇においては夏の麦帽子みたいにありふれたものであった」と金文輯からひどく批判された。このような状況から李箱は東京への脱出を夢見るようになった。

私は何篇かの小説と何行かの詩を書き、私の衰亡してゆく心身の上に恥辱を倍加した。これ以上、私がこの土地で生き続けてゆくことはきわめて困難なところにまで差しかかった。私はとにかく聞こえよく言えば亡命しなければならないだろう。

どこに行こうか。私は会う人ごとに東京に行くと豪語した。それだけではなくある友人には「電気技術に関する専門の勉強をしに行く」とか、学校の先生に会っては「高級単式印刷術を研究する」とか、仲の良い友人には「我輩は五ヶ国語に精通する予定である」、甚だしくは「法律を学ぶつもりです」とまで、ほら話をぽんぽんと言うのである。たいていの友人はふつう騙されるようだ。しかし、この空宣伝を信じない人もたまにはいる。とにかくこれが永久にすっからかんになってしまった李箱の、最後の空砲に過ぎないことだけは事実であるだろう。（『逢別記[2]』六八）

妍はおれの後ろを三、四歩ついてきたようだ。しかしおれは、例年十月二十四日頃には死体が幾日したら腐りはじめるのか、それが気がかりであった。

「箱！　どこに行くのですか？」

おれはどぎまぎしているうちに適当に、

「東京」と答えた。

もちろんこれは嘘っぱちだ。しかし妍は私を引き止めない。（『失花』一四八）

李箱が、多くの作品に東京への願望を表現しているように、彼に「東京」への脱出は切実な問題であった。その「東京」行きが実現できるかには、「最後の空砲」「嘘っぱち」になることも考えていたが、結局、李箱の東京行きは一九三六年十月下旬ごろ実現された。それは、李箱が二次喀血をしてから三年も経っていた時であった。その当時の肺結核とは、死と同様な意味を持っていた時代であったので、李箱は自分の命があまり残っていないことを知りながらも、一つの突破口として東京行きを選んだのであった。

私の思い描いていたマルノウチビルディング――通常マルビル――は、少なくともこの目の前にあるマルビルの四倍はある壮大なものであった。ニューヨークのブロードウェイに行っても私は同じような幻滅を受けるのだろうか――とにかく、この都市はガソリンの匂いがするんだなぁ！が東京の第一印象だ。

われわれのように肺が丈夫でない人間はまずこの都市で暮らす資格がない。口を閉じても開いても、すっとガソリンの匂いが滲透してしまうので、どんな食べ物を食べてもガソリンの味がする。ということは、東京市民の体臭は自動車と似たようなものなのであろう。（「東京」二七〇）

李箱は、思ったより小さいマルノウチビルディングの規模に失望し、「幻滅をうける」というが、実は「ガソリンの匂い」に幻滅をうけていた。「自動車が靴の役割をしている」大都市の東京へ来たため、肺結核を病んでいた李箱に「ガソリンの匂い」は、苦痛そのものであったことと想像できる。念願の「東京」行きは実現されたが、その「東京」行きが「とんでもない桃源の夢であったこと」を李箱は告白した。

（ここは東京だ。おれはどういうつもりでここにやってきたのか？　赤貧――コクト――が言っていたっけ――才能のない芸術家はむやみに自分の赤貧を見せびらかすなと――ああ、おれに貧困を売り物にする以外にどんな才能があるっというんだ。ここは神田区神保町。おれが幼い頃に帝展の二科会に葉書を注文した、それがまさにここだ。おれはここで今、病床にいる）（『失花』一四二）

実際、李箱は神田区神保町で下宿をしていたが、「どういうつもりでここにやってきたのか」わからなくなって、さまよっていた。それに、病床にまでついてしまったので、李箱は東京に来たことを後悔した。「生きようとして生きようとして」来た東京で李箱はなんにも出来なかった。そのため、李箱は東京よりガソリンの匂いのしないソウル（その当時京城）をなつかしく思うようになり、その思いは僻村成川にまで至っていた。

西を見ても野原、南を見ても野原、北を見ても野原、ああこの野原はどういうつもりでこんなに限りなく広がっているのか？　どういうつもりであんなにまで緑一色に染まってしまったのか？（「倦怠」二四六）

「倦怠」は、李箱が平安南道成川へ旅行したことを題材にしたものであり、「成川体験」は、「結核とはまったく関係な

い李箱文学の田舎との出会い」である。東京でガソリンの匂いのため苦しんでいた李箱においては、どこをみても「緑一色」の成川が、一番なつかしく思えてきたのは当然であったのであろう。

その場を離れてみると、その場がよく見えてくる。桃源の夢であった東京に行ってみて、始めてソウルと成川が李箱にはっきり見えてきたのである。すなわち、「倦怠」は、肺結核を病んでいた李箱に成川が一番住みよいところであるという李箱の告白を、「十二月十九日未明、東京にて」書いたものであった。「李箱においての東京」は、ソウルと成川の新しい発見ができた場所であったと言えよう。

李箱は一九三七年二月に思想犯として捕まり、一九三七年四月十七日に東京で死を迎えた。あまりにも悲しい死であった。李箱の六ヵ月に満たない東京生活であった。

二　横光利一文学におけるソウル

横光が初めて朝鮮（韓国）[3]へ行ったのは父梅次郎の葬儀のためであった。一九二二年八月二九日に父梅次郎が韓国の京城（ソウル）[4]で突然亡くなったからである。

朝鮮へ初めて私の渡つたのは、今から二十一年も前である。本年度の徴兵の年齢にあたつている青年たちが、ちやうど生まれたころの八月であつた。（中略）私にとつてはそれは海を渡つた初旅であり、父の骨を迎へに行く学生の一人旅であつたから悲しみがふかく、やうやく涙を泳へているやうな、緊張したときだつたが、（後略）

（「朝鮮のこと」十四巻　二七六）[5]

その当時、横光は早稲田大学の学生で、小島キミ子との恋愛に悩んでいるところであった。韓国へ行ってみると、父親の財産はほとんどなかった。そのため、キミ子との結婚もむずかしいということがわかってきた。

私は残して来た恋人あてに手紙を書いた。

「もうあなたと結婚は出来ません。父に金が何もないのを知りました。無論、僕もありません。帰る船賃さへも、まだこれから取るのです。あなたは僕を好きだと云つてはいけません。僕はあなたと僕とを引き裂いた金が欲しくなつては、困るのです。」

（「青い大尉」一巻　三三六）[6]

それに、キミの家からは結婚を反対されていた。この当時のキミへの横光の悩みは、小島勗宛ての手紙にまざまざと現れている。それは一九二二年九月に書いたものとして推定さ

れる手紙が三通残っているのである。

今から十七年ほど前、初めて京城まで行つたことがある。そのとき、なるほど、大陸といふものはかういふものかと、空の青さの内地とどことなく違ふ透明な、応援力の少しもない、はかなく美しい、其処気味悪い空を仰いで思つた。それまでは空といふ言葉を見ても、私の頭の中には、日本の空の色より感ずることが出来なかつた。

（「島国的と大陸的」十三巻　四八七）[7]

何の親しみもない空だ。透明で虚無的で応援力が少しもなく、それかと云つて、もしあの空に曇られたならとても仰ぐのも恐ろしくなるに相違ない。

（「旅行記」十三巻　七三）

横光は、韓国の空を「透明」「応援力の（が）少しもない」「虚無的」と感じている。そのような空へのフィーリングは、父を亡くした横光自身の心情が反映されていたともいえよう。

二度目の時は、それから八年もたつたときで、このときは飛行機で、空から京城の上へさしかかつて来ると、父がまだそのあたりに生きていて、うろうろしながら喜び迎えてくれているやうに感じられ、涙が出たりした。三度目は外国からの帰途で、このときの飛行機は平壌に不時着したが、それが幸ひ一夜をここに泊つた。私にはもうこのときは、旅の思ひはなかつた。

（「朝鮮のこと」十四巻　一二七六）

横光の二度目の韓国訪問は一九三〇年九月一六日にあった。この二度目の訪問は、学生の身分の初めの訪問とはまったく違っていた。横光は、一九二三年五月に「蠅」と「日輪」をもって文壇に登場し、「新感覚派文学」の代表者として活躍してきていた。一九三〇年八月には『機械』を書きあげ、九月に『改造』に発表した。その『機械』は、小林秀雄の激賞を得ていたところであった。ちょうど、九月には満鉄から菊池寛らと招待され、その途中、ソウルも訪問することになっていた。

九月十三日消印　大阪より東京市世田谷下北澤一四五
横光千代子宛（封書・メモ用紙三枚・ペン書）

下の無電局では吾々の今通りつつあることを大阪と東京へ報らせつつありと操縦士が云ふ。下を見てみる。飛行機の上で書く。今、母の生まれた上を通る所。一路平安少しも揺れず、もう直ぐ大阪。

（『書翰』十六巻　一一三）[8]

九月十六日消印　京城より東京市世田谷下北澤一四五
横光千代子宛（封書・メモ用紙十一枚・ペン書）
低空飛行をやつている。八百米くらひの高度。
下に厳島がある。きれいなり。
もう広島を過ぎた。今日は機が揺れること、ひどい。厚い雲の下を通つているからだ。
僕の国宇佐が見える。
橋本の町、炭鉱町が下にある。
今福岡の太刀洗で十分降りて、また空へ舞い上る。
いよいよ朝鮮海峡へさしかかつた。
機は今から八人乗りに変つたのだ。便所までついている。
今夜着くやいなや京城で講演だ。たまらぬ。（中略）
儲けた話を書いている中に、もう朝鮮海峡へ出て了つた。
あめちよこを舐めているうちに、もう朝鮮へ着いた。（中略）
機はウルサンで十分間程停つた。今京城へ向ふ所、禿山ばかりが陸続と連なる。もう二三十分で京城へ着く。皆もう疲れたと見えてぐつたりしている。午後の四時頃だ。今、六時、京城朝鮮ホテルへ着いた。（『書翰』十六巻　一一四）

「今、母の生まれた上を通る所」「僕の国宇佐が見える」と書いているように、横光は韓国の訪問を前にして、両親のことを考えていたことがわかる。「母の生まれた上を通る所」は伊賀上野のことを、「僕の国宇佐」は父梅太郎の生まれた土地のことを言っているが、父の死の八年後、ソウルを再び訪問するにあたって、横光にはさまざまな思いがあったにちがいない。ソウルへ着いたその夜、京城日報のホールで文芸講演会があった。

一九三〇年九月十六日付けの「京城日報」に以下のような記事が出ていた。

（表題）
空を駆り文壇の巨星ら華々しく入場す　すばらしい人気を浴び汝矣島に安着
満員立錐の余地なき盛んな文芸講演会　それぞれ蘊蓄をかたむけて完全に聴衆を魅了
（記事内容）
重々しい調子で
私は八年前にこの地で父親を失つた、京城は私にとつて感慨深い土地なのだ、飛行機で上空を飛んだ時、父親の顔が眼のあたりにちら〳〵した
と身の上話に聴衆をしんみりさせるや、代わつて

その夜の文芸講演会でも、横光は八年前にソウルで亡くなった父のことを述べていた。それくらい横光においてソウル

というところは、当然父にまつわる思いのある場所であった。その当時、京城中学生であった森敦はその講演会に参席していた。この文芸講演会がきっかけになり、森は横光に恩義を受けることになるが、森が初めて横光の家を訪ねたとき、横光はやはりソウルのことを言っていた。

（前略）そのよく分からない髪型の髪を額からさッと掻き上げて、精悍な感じながらも美しい笑いを見せて言うのです。「北京に行く途中、もっとも美しい街といえば、京城ですな」横光利一はよく突如として思いついたように、ものを言う人です。そんなことはまだよく知りませんでしたが、なぜ京城が出て来たのか解しかねていると、「あの京城の空を飛んでいると、親父の霊が漂っているような気がしますな」すると、横光利一のご両親も京城にいたのかなと思っていますと、（後略）（「講演　第八夜　美しい夜」[9]）

横光利一は言っていた。北京を除けば大陸に旅して、京城ほどいい街はない、と。ぼくもそう思う。（「京城の空」[10]）

「もっとも美しい街」、「京城ほどいい街はない」というような表現から横光のソウルに対しての愛情が感じられる。それは、「親父の霊が漂っている」ソウルであったからであろう。大分の「宇佐市民図書館・渡綱記念ギャラリー」で「横光利一と森敦」という題で、「横光利一世界」展が開かれた（二〇〇七年八月二五日から十月十四まで）。この展示会から横光と森の深い絆が見られる。横光が、特に森に愛情を抱いていたことは、ソウルという二人の共感の場所があったからではないかと思える。横光利一の文学においてソウルは、父とともに生きている忘れられない場所として描かれているのである。

三　李箱と横光利一の文学の類似性

李箱の作品から横光利一の名前のあるところを引いてみる。

「一着選手よ！　急行列車が沿線の小駅を非常に小さな碁石を黙殺して通過するように、私を無視して通過なされることを望む次第でございます」（中略）

この場合にも言葉を蕩尽した浮浪者の資格で恐懼、横光利一氏の出世作をこっそり取りだしてきたのである。

（『童骸』九八）

この物語を聴いた泰遠が「これは横光利一の機械みたいだよ」と言った（もちろんこの三人はその翌日、いつそん

な出来事があったのかという具合に相変わらず仲睦まじかった)。(『金裕貞――小説体で書いた金裕貞論』二〇二)

多くの研究者に指摘されているが、「急行列車が沿線の小駅を非常に小さな碁石を黙殺して通過する」というところは、横光利一の『頭ならびに腹』の冒頭文「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けていた。沿線の小駅は石のように黙殺されていた」との類似性が見られる。「恐懼、横光利一氏の出世作をこっそり取りだしてきた」という表現には、李箱が横光の存在を意識していたと見られる。

『頭ならびに腹』は、一九二四年十月に『文芸時代』の創刊号に発表された。その『文芸時代』の創刊号を見て、千葉亀雄が「新感覚派の誕生」という評論を書いた。このことから『文芸時代』の文学は、新感覚派文学と命名され、特に横光の『頭ならびに腹』は新感覚派文学の代表作となってしまった。李箱が「横光利一氏の出世作」と言っている作品は、いうまでもなく『頭ならびに腹』のことを指しているのであった。

新感覚派文学が日本のモダニズム文学であるように、韓国のモダニズム文学は九人会のメンバーがその中心であった。その九人会のメンバーに李箱もあった。九人会は、韓国の新感覚派とも呼ばれたのである。九人会は、一九三三年十月に親睦で集まったが、一九三六年に機関紙『詩と小説』を発刊しただけで、その活動はほとんどなかった。

機体が滑走を始め出した。私は足のやうな車輪の円弧が地を蹴る刹那を今か〳〵と待ち構へた。と私の身体に、羽根が生えた。車輪が空間で廻ひ停つた。見る間に森が縮み出した。家が落ち込んだ。畑が波のやうに足の裏で浮き始めた。私は鳥になつたのだ。鳥に。私の羽根は山を叩く。羽根の下から潰れた半島が現はれる。　(『鳥』三四八)[11]

僕は急に脇の下がむず痒くなった。ああ、それは僕の人工の翼が生えていた跡だ。今ではなくなったこの翼、頭の中では希望と野心の抹消されたページが、ディクショナリーが捲られるようにちらついた。

僕は歩みを止め、そして、よし一度、こんなふうに叫んでみたかった。

翼よ、今一度生えよ。
飛ぼう。飛ぼう。飛ぼう。もう一度飛ぼうよ。
もう一度だけ飛んでみようよ。　(『翼』五九)

横光の『鳥』の最後の箇所と李箱の『翼(ナルゲ)』の最後の箇所である。『鳥』と『翼』という題目からも、類似性

がみられる。「翼」と「鳥」は深い関係がある。「鳥」は「翼」がないと「鳥」でなくなると思う。また、「鳥」は「翼」なしに「飛ぶ」ことができない。人間にはその「翼」がないので、飛ぶことができない。そのため「人工の翼」の力によって飛んだのである。それが飛行機の発明であった。

『鳥』の「私の体に羽根が生えた」のは、「飛行機」のことを言っている。それは「飛翔」の象徴なのである。「人工の翼」の飛行機によって飛翔していく『鳥』の「私」と、「人工の翼」によって飛翔しようとする『翼』の「私」が求めたことは、その場から脱出し、新しい生活を求めることであった。

私はひそかに鏡がある室内に入る。私を鏡から解放しようとする。しかし、鏡の中の私は沈鬱な顔で必ず同時に入ってくる。鏡の中の私は私にすまないと伝える。そのために囚われの身になったように、彼も私のために囚われの身になり震えている。

（「詩第十五号」二七）[12]

「私」は「鏡の中の私」と話をしている。「鏡の中の私」も「鏡の外の私」も、「私」である。「鏡」は「私」を映す機能を持っているので、「自分」が「自分を見る」ことができる。横光の主張した「四人称」とは、「自分を見る自分」のことを言っている。「自分を見る自分」は、「自分を見る」行為をする「自分」と「自分」に「見られる自分」と分けることができる。「自分を見る」行為をする「自分」は「鏡の外の私」であり、「自分」に「見られる自分」は「鏡の中の私」に当たる。横光の「自分を見る自分」は、李箱の「鏡の外の私」と「鏡の中の私」になっていたのである。李箱は「鏡」を通して、横光のいう「自分を見る自分」を発見できたのである。

四　李箱と横光利一における一九三六年の意味

一九三六年は、李箱が日本へ行った年であり、横光利一はヨーロッパへ出かけた年であった。横光は、『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』からヨーロッパに特派され、「パリを根拠として各地を歴訪、氏の独特の尖鋭な感覚による見聞記」を掲載する予定であった。それは、二月二十二日から八月二十五日までの六ヶ月くらいの旅になった。

横光は、八月一日にベルリン・オリンピックの開幕式に参加し、八月十一にベルリンを発ってシベリアに向かった。オリンピックのマラソン競技は、九日午後三時に行われ、日本の代表者として参加した韓国人の孫基禎（ソン・キチョン）選手が優勝し、南昇龍選手も三位をした。ところが、横光はこのようなマラソンのことにはついては触れなかった。ただ、マラソンのフィルムのことだけ言及したのである。『欧洲紀

行』からマラソンのことが書いてある日を見よう。

八月九日

夜になつて突然マラソンの映画を日本へ持つて帰つてくれないかと頼まれる。　（『欧洲紀行』十三巻　三七八）

八月十一日

マラソンと言へば両社にとつては、オリンピック最大のフイルムである。実は私と大山氏も共にシベリア中を競争しなければならぬのだが、同一の汽車の中ではそれも出来ぬ。

（三八〇）

八月廿日

満州里では、わたしの持つて帰つたマラソンのフイルムを受けとりに来た男が真先に私の所へ近寄つた。（中略）「私が記者です。どうもありがとうございました。お疲れでせう。ハイラルから今飛行機で来たばかりですが、さつきまでは豪雨で今夜帰れないかもしれないのですよ。朝日の方も困つているやうです。」

と云ふ。第二に私は競争を国境で見たのである。「何もかも日本はこれだ。」と思ふ。

ヨーロッパでは新聞は号外も出さぬ。　（三九二）

横光は『欧洲紀行』に「何もかも日本はこれだ」と、マラソンに関しての自分の感情を表しているだけで、優勝者の孫基禎に関しては一言も触れていない。オリンピックでの日本の成績はよくなかったので、横光ががっかりするところがある。せっかくマラソンで優勝したのに、横光がそれについてくわしく述べてないことには不思議な気がする。ところが、韓国ではこのような事件が起こっていた。

一九三六年八月、ベルリン・オリンピック。朝鮮人の孫基禎（ソン・キチョン）選手は、「日本代表」としてマラソンに出張した。（中略）孫選手は、二時間二九分一九秒二の好タイムで優勝。日本では新聞の号外が出る騒ぎとなった。だが、朝鮮の『東亜日報』では、表彰台の孫選手の胸の〝日の丸〟を塗りつぶして掲載。植民地当局を激怒させて、一〇カ月にわたる停刊処分となった。これは、日本では比較的よく知られた事件だろう。

（黒川創、「旗のない文学」、『朝鮮』三三三）

『東亜日報』の「表彰台の孫選手の胸の〝日の丸〟を塗りつぶし」は「旗のない」民族に起こった悲しい事件であった。

欧洲旅行から帰ってきた横光は、一九三七年四月十四日から『旅愁』を連載しはじめた。敗戦後、横光文学は戦争責任ということで批判されるが、横光においてヨーロッパの旅行

は、彼の文学世界に大きく影響したにちがいない。一九四三年の「朝鮮のこと」には、横光が半鐘漢の詩集「たらちねのうた」を買い、「一枝について」を紹介しているところに注目する。半鐘漢は金鐘漢の間違いであると思うが、横光がこの作家を選んだのは示唆的である。韓国で金鐘漢は親日文学者とされているからである。

反面、李箱は一九三七年四月一七日に東京で死を迎えた。「旗のない」国のモダニスト李箱の死はたいへん悲しかった。一九三六年韓国の李箱は東京へ、日本の横光利一はヨーロッパへそれぞれ旅にでたのであるが、その旅は彼らの文学のゆくえに大きく影響したのである。

景福宮の前にあった朝鮮総督府はすでに撤去され、景福宮は二十年の予定をもって復元されているところである。『翼』の主人公「私」の行った京城駅のすぐ隣に、現代式のソウル駅が新しく建てられた。『翼』の「私」は新しいソウル駅を見て何というのであろうか。

五　李箱と横光利一研究の現況について

新宿書房から『〈外地〉の日本語文学選』三巻が編纂された。それは、一九四五年以前に日本でない地域から日本語を使った文学を集めたものである。一巻は『南洋・南方／台湾』、二巻は『満州・内蒙古／樺太』、三巻は『朝鮮』である。編者の黒川創は、「日本文学でほとんど無視されてきた一九四五年以前の日本語で書かれた外地の日本語文学を紹介する作業の一環である」と言っている。

『朝鮮』には、李箱、李孝石などの韓国作家と高濱虚子、井伏鱒二などの日本人の作家の作品が載せられた。『朝鮮』の「はじめに」を見ると、天才作家李箱に比重を置いている。李箱の作品としては『異常の可逆反応』『三次角設計図』『建築無限六面角体』などからの日本語詩を紹介している。『朝鮮』での李箱の詩の紹介は、日本に李箱を知らせるよい機会であったと思う。

最近、李箱文学の本格的な日本語の翻訳として、崔真碩編訳の『李箱作品集成』（作品社、二〇〇六年）と蘭明訳編の『李箱詩集』（花神社、二〇〇四年）が出版された。この二つの本は、翻訳されたことのない李箱の作品が訳されていて、これからの日本での李箱研究に大きく貢献すると思われる。川村湊の「「日本」における李箱」（『李箱作品集成』付録、二〇〇六）と藤石貴代の「日本における李箱文学研究―現況と課題」（『YiSang Review』第三号、李箱文学会、二〇〇四）には、日本での李箱研究が把握できる資料である。

韓国での横光研究については、筆者の「韓国における横光利一研究の現況について」の一部をここに紹介する。

一九九〇年の後半になってから横光研究は韓国文学との比較研究も行われてきた。また一九九九年には『上海』が韓国語に訳された（『상하이』、김옥희訳、小花）。最近の若手研究家の発表としては、金禎薫「横光利一「純粋小説」論の可能性」（韓国日語日文学研究五十一輯、二〇〇四・十一）、姜素英「横光利一における朝鮮―「青い石を拾ってから」と旅行記を中心に―」（韓日国際学術フォーラム、二〇〇六・一二・九）、金泰暻「横光利一『旅愁』におけるナショナリズム」[13]（韓国日本学会、二〇〇七・二・一〇）などが見られる。

以上のように、韓国の李箱と日本の横光利一のそれぞれの東京とソウルでの経験、二人の作品の類似性について考察してみた。韓国での横光研究と日本での李箱研究はこれからが始まりであるといえるであろう。

（注）

（1）蘭明訳編『李箱詩集』（花神社、二〇〇四）、二九項。

（2）崔真碩編訳『李箱作品集成』（作品社、二〇〇六年）。以下、李箱の作品の引用はすべてこの本からであり、本稿での下線はすべて引用者によるものである。

（3）以下、引用文を除き「韓国」にする。

（4）現在　ソウル。以下、引用文を除き「ソウル」にする。

（5）『定本　横光利一全集　第十四巻』（河出書房新社、一九八八年　再販）。

（6）『定本　横光利一全集　第二巻』（河出書房新社、一九八一年）。

（7）『定本　横光利一全集　第十三巻』（河出書房新社、一九八八年　再販）。

（8）『定本　横光利一全集　第十六巻』（河出書房新社、一九八七年）。

（9）『森敦全集　第二巻』（筑摩書房、一九九三年）四七六～四七七項。

（10）『森敦全集　第五巻』（筑摩書房、一九九三年）二六項。

（11）『定本　横光利一全集　第三巻』（河出書房新社、一九八一年）。

（12）蘭明訳　編『李箱詩集』

（13）李錦宰「韓国における横光利一研究の現況について」（「横光利一文学会　会報」第十一号　二〇〇七・六・十六）。

（付記）

本論文において横光利一全集と京城日報の引用にあたって、漢字は新字体に、「ゐ」は「い」にした。

本論文は、二〇〇七年十二月十四日の東亜比較文学国際学術研討会（台湾淡江大学外国語文学院日本語文学系主催）で「韓国の李箱と日本の横光利一の文学―外地の経験と作品の類似性を求めて―」というタイトルで口頭発表したものを整理したものである。